

健康文化

ナミビア紀行

北川 勝弘

1. はじめに

本年（1999年）3月下旬の2週間、JICA（国際協力事業団）の短期専門家としてアフリカ南部のナミビア共和国を訪問する機会を得た。その目的は、同国がわが国に申し入れてきた「ナミビア大学農学部設立支援プログラム」について、わが国が今後どのように対応すべきかを判断するための、予備調査を行うことであった。私は率直なところ、ナミビアに出かけるまでは単に“乾燥地帯にある砂漠の国”というイメージしか思い浮かばなかったのであるが、たまたま四年一貫教育における全学共通教育科目中の「自然環境と人間」という環境問題に関する講義をここ数年間、担当してきた者として、砂漠やサバンナなどの実態に直接触れ得たことは、何よりも素晴らしい体験であった。

今回のナミビア旅行には、私と名古屋大学本部のM課長の二人で出かけた。二人ともアフリカ旅行は初めてだった。「2週間の旅程」と冒頭で書いたが、日本からアフリカまでの道程はやはり遠いもので、途中でJICA南アフリカ駐在事務所に立ち寄って打合せを行う必要もあり、往復にそれぞれ3日ずつを消費した結果、実質的なナミビア国内での滞在日数は8～9日間となった。

本稿では、今回のナミビア旅行を通じて私が見聞した事柄のうちのいくつかを、思い出すままに記してみたい。

2. ナミビア共和国の概要

ナミビア共和国は、アフリカ南部の大西洋に面した国で、南アフリカ共和国西部のすぐ北隣りにあって、オレンジ川および東経20°の線で国境を接している。国の東部はボツワナ共和国と、北部はアンゴラ共和国とそれぞれ国境を接している他、東北端から緯度方向に東へ450kmほど細長く伸び出した地域の一部でザンビア共和国とも接している。面積は82.4万平方キロメートル（日本の約2.2倍）。南北方向が1,200km、東西方向が1,000km（一部でさらに450kmほど伸びている）～400kmの台形状を呈している。緯度は17°～29°の間にあり、要するに国土の大半が熱帯、一部が亜熱帯である。

ナミビア西部の大西洋岸に沿って、南アフリカ国境付近からアンゴラ国境まで、地球上で最も古い砂漠といわれるナミブ砂漠が長く広がり、南半分は「ナミブ砂漠自然公園」として、また大西洋岸の北半分は「スケルトン（どくろ）海岸国立公園」に指定されている。他方、東部の南アフリカおよびボツワナとの国境付近にはカラハリ砂漠が広がっていて、南アフリカとボツワナ側の砂漠地域は、それぞれ国立公園に指定されている。首都ヴィントウックの位置はナミビアのほぼ中央部にあたり、標高1,833mの高地にある。

ナミビアの歴史をたどると、1884年に「南西アフリカ」としてドイツの植民地となって後、第1次世界大戦開始後の1915年に南アフリカによる侵入、占領を受け、それ以来、1990年に至るまでずっと実質的に南アフリカの植民地になっていた。アフリカの各国が次々に独立していった1960年代以降、南西アフリカ（1968年には国連決議に基づいて国名がナミビアと改称された）でも独立運動が盛んに展開され、1990年3月にアフリカで一番新しい独立国となった。

1990年2月の制憲議会で満場一致で採択されたナミビア憲法は、アフリカで最も民主的な憲法の一つであるといわれ、三権分立、基本的人権の保障、帰属する民族を理由とする差別の禁止を明記し、複数政党制、私有財産制、経済自由主義等を保障している。また、政治情勢はとても安定している。

ナミビアへの日本からの到達方法は、今回、JICAの手配で名古屋空港からシンガポール航空を用い、シンガポール経由（シンガポール空港内で仮眠。2日目早暁のシンガポール発便に乗り換え）で南アフリカのジョハネスバーグ空港まで行き、翌日（3日目）、南アフリカ航空でナミビアの首都ヴィントウックまで2時間の飛行、というコースをとった。ジョハネスバーグからヴィントウックに向かう飛行機の窓からは、広大なカラハリ砂漠が見下ろせたが、ナミビア側に入ってからサバンナの特徴である背丈の低い叢がどこまでも続き、また所どころに思いがけない地形の隆起が見られて、いつまでも見飽きなかった。

3. ナミビア大学農学部

私たちのナミビア大学農学部における調査の支援のために、JICA南アフリカ駐在事務所駐在員のN氏が、多忙な日程を割いて2日間も、わざわざナミビアまで同行してくれた。ヴィントウック国際空港から市郊外の宿泊ホテルまでの道程は、N氏が空港のレンタカー事務所から借りてくれた自動車で、快適なハイウェイ・ドライブを楽しんだ。ちなみに、南アフリカ共和国でもナミビアでも、日本と同じ左側通行の交通システムを採用している。

ナミビア大学農学部へは、その翌朝に出かけた。農学部は、首都ヴィントウックの郊外30kmほどの位置にある広大な畑のまっただ中であって、一群の建物が畑に囲まれていた。ナミビア大学農学部は、1996年に創立されたばかりであり、学部長はタンザニア人、副学部長はマラウイ人、5人いる学科長はいずれも外国人で構成されていることから、如何に早くナミビア人の教員後継者を養成するかが、目下の最大の課題となっている。

背の高いタンザニア人の学部長と握手を交わすと、彼は早速、ナミビアにおける私たちの活動予定表を手渡してくれたが、それを見て驚いた。ナミビア大学農学部の関連施設が、ナミビア西部の大西洋岸の町（スワコプムンド）と北部のアンゴラ国境付近の町（オゴンゴ）の2ヶ所にあり、それらの場所は両方とも、今回是非とも見学してきて欲しいからと、5日間で総計2,600kmに及ぶドライブの予定が示されていた。

2月上旬に東京新宿のJICA本部へ出かけたとき、専任の看護婦さんが各種予防接種を受けておく必要性を説明してくれた後で、にこやかに「ナミビア北部（アンゴラとの国境付近）はマラリア汚染地域のようなけど、マラリアの予防接種は開発されていないので、努めて北部には近づかないように自分で気をつけることね」と、注意してくれた。帰名後、あわてて名古屋市内の診療所に駆けつけ、数週間から半年ないし1年の間隔をあけてそれぞれ3回ずつ接種しないと効果が無いという予防接種を、A型肝炎、破傷風、狂犬病の3種類について1度に2種類ずつ、出発までに2週間の間をあけて1～2回ずつ受けた。接種回数の足りない今回の予防接種が全く気休めに過ぎないこともさることながら、一番物騒なマラリアについて、「君子、危うきに近寄らず」以外の対策を持ち合わせていないことは、片時も脳裏を離れなかった。

ところが、何と、学部長から渡された日程表には、私たち二人が密かに恐れていたナミビア北部地域での滞在が、延べ3日間も予定されていたのである。私たちは早速、ヴィントウック市内のモールに連れていってもらい、大きなスーパーで、ミネラルウォーターとともに電気式蚊取り線香装置を購入した。

4. ナミブ砂漠横断の旅

首都ヴィントウックから真西へ300kmほど離れた大西洋岸の町スワコプムンドは、ドイツ人が19世紀末頃に建設したという落ち着いたたたずまいの町である。ヴィントウックからは少し遠回りをしなければならないこともあって、スワコプムンドまでは、車で時速120kmで飛ばしても3時間半近くかかった。ヴィントウックから伸びる幹線国道は、途中のやや大きな町までは片側

2車線ずつの大きなハイウェイだったが、次第に往復2車線の道幅に落ち着いていった。私たち二人を案内してくれたのは、ニギーラさんというマラウイ人の副学部長で、きわめて温厚な紳士である。

道すがら、赤土の畑に点々と聳える（高さ2mはあろうかという）巨大な蟻塚や、電話線の電柱や樹木の葉の茂みに架けられた、これも巨大な鳥の巣の数々に目を奪われているうちに、車はナミブ砂漠の中央部にさしかかる。気がつくのと、少し前まで車の左右に見えていた低林がいつの間にか姿を消し、背丈のきわめて低い叢が所々に点々と生えているだけになっていた。「ナミブ」とは、現地語で「何も無いところ」を意味するのだという。今回のナミブ砂漠通過地は、ナミビア中部を東西に横断する国道上であったため、有名なもっと南部の「赤い砂漠」を見ることはできなかったが、ニギーラ先生は何度も車を止めて、果てしなく広がる砂漠を指さしては、「これがナミブ砂漠なんですよ」と教えてくれた。砂漠には、全くの砂だけではなく、背丈のきわめて低い叢が点々と生えている所もある、ということを知った。

首都ヴィントウックから大西洋岸の町スワコプムンドまで、国道と共に鉄道線路が走り、また給水用の巨大なパイプが砂漠の上に途切れることなく敷設されていた。国道がスワコプムンドに近づいて、とある川の流れてきた時、その流域一帯には緑なす樹林が茂っていた。砂漠地帯であっても、水の補給さえ保障されれば森林が成立することを、目の当たりにしたわけである。

5. 大西洋岸の町

その翌日、スワコプムンドから70kmほど北に離れたヘンティス・ベイという小さな集落のはずれに出かけた。そこでは、ナミビア大学の海洋生物研究施設が建設中であった。そこに、日本の高知大学で研究したこともあるという英国人の若い客員教授がいて、太陽光と砂漠の砂と海草とをうまく活用した砂漠地農業の新たな試みを行いたいのだと、これから始める実験についての抱負を語ってくれた。彼のアイディアによると、まず、毎朝、海岸線に沿って午前中だけ必ず生ずる巨大な雲を活用して、純粋な水を作り、そうして集めた純水を畑作の作物に少しずつ灌水してやるのだという。その一連の実験経費は、大学の学長手持ち予算の中から、一定の審査を受けて獲得したということであった。

スワコプムンドから南へ40kmほど離れたウォルビスベイという町に至る途中に、観光客が必ず立ち寄るといふ、大きくてきれいな砂丘があった。その砂丘をはじめ、所々に出現する砂丘には、草が全く生えてはおらず、まさに自分がこれまで持ち続けてきた「砂漠のイメージ」にぴったりと一致していた。

ウォルビスベイからスワコプムンドに戻る海岸線の至るところで、とてもたくさんのフラミンゴの群れを見かけた。彼らは、長い嘴を水の中へぱっと突っ込んで上手に魚をくわえていた。また、道すがらの所々で、海水から生産された真っ白い塩の大きな塊が、10mほどの高さでいくつも積まれていた。

海岸沿いの道路は、あるときは海拔数メートルから10mくらいの高さで、距離も海岸から数十メートル～数百メートルほど離れた場所を走ることがあるが、そうした一画で海藻や海草が叢状に、まるで栽培されたような感じでびっしり生育しているところがあった。それは、台風や大波の際に、海から打ち上げられた海藻や海草の類が窪地に残されて、そうした「畑」が成立するのだという。これも、砂漠地帯が全くの根源的な「不毛地帯」を意味するものではないことを、確信させてくれるに足る景観の一つであった。

6. エトーシャ国立公園

自動車旅行の3日目は、ナミビア北部の国立公園として有名なエトーシャ沼に向けて、700～800kmの長旅だった。その日の宿泊は、エトーシャ沼の敷地内に建てられたバンガロー風の建物に泊まった。半袖姿のニギーラ先生は、自分の部屋に入る前に、既に一匹の蚊に腕を刺されてしまった、という。思わず戦慄が走る。私はずっと長袖のシャツを着込んでいるから、とりあえず蚊に刺される心配はないはずだ、と思い直して部屋へ入ってみると、ベッドの頭の所には、壁に作り付けの特製の大きな折畳式蚊帳があつて、天井にはゆっくり回る扇風機が取り付けられていた。

その夜、いよいよ懸案の電気式蚊取り線香装置をベッド傍の三つ穴コンセントに差し込み、初めて試してみた。ナミビア北部のマラリア蚊については、エトーシャに到着するまでの途中のガソリンスタンドでも、「マラリア汚染地域につき、注意」なる掲示が、大書して壁に張り出されてあつたくらいだから、なかなか油断はできない。ニギーラ先生に聞いてみると、彼は首都ヴィントウツクの自宅でも必ず蚊帳に入って寝ている、とのこと。翌日、目が覚めてから確かめてみると、電気式蚊取り線香装置は順調にその機能を発揮したようで、セットした薬品1袋(4cm四方の大きさ)のほぼ半分ほどが気化していた。

エトーシャ沼では、実にたくさんの動物が放し飼いされており、トラックに乗った観光客を沼のあちこちに案内して野生の動物をすぐ近くで見せる、ゲームドライブという催しが人気を集めていた。母親ゼブラが前足で子供のゼブラの腹を叩き割り死なせてしまった直後に、その場所を通りかかったマイカーの女性運転手が、道路上に横たわった子供ゼブラの死骸と、母親ゼブラの血に染

まった左前足を見て、頭を振りながらしきりに「恐ろしいことだわ」と連発していた姿が印象的だった。そのような残虐な事件も、野生動物の偽らざる自然の生態の一面なのだなと、思い知らされたことであつた。

7. 北部国境付近の町

アンゴラとの国境に近いオゴンゴの町に、ナミビア大学農学部の分校が設置されていて、農業工学を専攻する女性の校長先生が私たちを迎えてくれた。出来るだけ少しの灌水で、効率的に水分補給する作物栽培方法について、いろいろ実験を繰り返している現場を、いくつも見学させてもらった。畑作のために大量に灌水すれば、必ず塩害が発生してしまうだろうから、それを防ぐうえで、少量の水を少しずつ、水を必要とする作物のすぐ根元だけに、ゴムパイプに細かい穴を開けて補給してやる方法は、きわめて合理的であると思う。

オゴンゴからヴィントウックへの帰路、オシャカチという町の道路端で大規模な青空マーケットが開かれていたので、ひとまわり覗いてみた。燃料用の薪として長さ 30cm ほどの木の枝を3本ずつ束ねたものが、たくさん莫藪の上に並べられ、1束当たり5ナミビア・ドル(1N\$=25円)で売られていた。一人の婦人が一束の薪を購入し、さっと頭の上にそれを乗せ、手も使わずに立ち去っていった。

8. おわりに

今回の見学旅行を通じて、ナミビアでは、実に大勢のアフリカ人を始めとする外国人が、ナミビアの真の自立に向けて誠心誠意をこめて努力していることが、よくわかった。私たち日本も、紐付きではない、本当の海外援助を実施すべきであることを、そうした先進例に触れて納得した。

今後、もしもナミビアを再訪する機会があれば、私も自分の持ち味を少しでも生かせる場面を見つけ出し、いささかなりとも現地の人々の自立促進のお役に立ちたいと願っている。狭い専門性よりは、広い知識の多面性が求められることを、オゴンゴの分校で、森林関係のカリキュラムを一人でこなしているカナダ人を見ていて、痛感させられた。

それにしても、5日間にわたり2,600kmにのぼる長距離をずっと一人で運転し、私たちをいろいろ案内してくださったニギーラ副学部長には、本当に感服させられた。ここで、改めて感謝の意を表したい。(1999.5.15 記)

(名古屋大学農学国際教育協力研究センター教授)